

大学で働くということ

会員 清水 俊佑



弁護士? いいえ, 大学職員です。

私は、4月から、母校の大学職員として勤務しており、一般的に弁護士業務とされるものを行っていない。インハウスということはできるが、企業ではなく大学という特殊な空間で働いているというのは、弁護士として、少し変わった働き方をしているのではないだろうか。

今のところ、法律問題にはほとんど関わっていない。そのように弁護士としての経験もなく、大学職員としても駆け出しの私が、ここで何を書くのが良いのかに迷ったまま筆を執っている。

今の大学生は…

年を経ると、自分よりも若い人の行動に対して、文句をつけたくなるものらしく、「今の学生は…」ということばを聞くこともある。そこで、最近感じた私が学生のころとは違うと感じたエピソードをひとつ紹介したい。

大学に入職する直前の3月に出身ゼミの合宿に参加させてもらった。そこで、4月からのゼミの課題について、先生は、作成した事例問題と参考文献などがついたレジュメを使うことを提案された。先生は「前に作ったものだから参考文献に載せたものは古いものもあるから」と言われたのである。それに対して、ゼミ生は反応がなく、顔を見ても意図が伝わっているとは思えなかった。そのため、私は、「載っていない新しいものは自分で探して読んでおくように」という意味だからね」と言ってみた。そうしてやっと理解したようであった。

ちゃんと理解している学生も存在する。しかし、このようにことばに表れたものだけを聞いている学生が増えたと感じている。

しかし、今の学生を悪く言っているのではない、そ

のような学生も、ことばに表せば素直に丁寧にこなそうとするのであり、それが特徴なのだと思う。

全入時代の大学

大学は、全入時代を迎えた。

大学は、これまで受験生を「選んでいた」が、これからは受験生に「選ばれる」ことが必要となる。大学は積極的に発信をしていかなければならない。

一方で、学生の傾向としては、目標がなく何をしたいかわからず、またどのような職業に興味があるかわからず、入学する学生が増加している。志望すれば大学に入れるため、目的意識をもって入学する学生が減っているからではないだろうか。大学を出ていなければなかなか就職先がない、周りもみな大学に進学するから、という理由で志望するので、高等教育の場であったはずの大学に目的なく入ってくることになってしまうのではないか。そのような状況にあることから、大学はキャリア教育に力をいれ、入学後に目的意識を持たせるための教育を行っている。

大学職員としての弁護士

職員として働く中でも、法律問題らしきものを耳にする場面はある。その中には、大学生や大学が大きく変わっていく時代だからこそ起きているのでは、と思えるようなものもある。弁護士であるからこそ、そのような学生を守ることができるのではないかと考えている。

全入時代の到来によって、エリートではない標準的な社会人を送り出す役割をも担うであろう大学において、学生が、社会へのよりよい一歩を踏み出す手助けをしていきたい。大変雑駁なものとなったが、大学職員としても弁護士としても中途半端な私がこれ以上馬脚を現さない裡にこの辺りで筆をおくことにする。